



古市公威の偉さ

7

金関義則

一九八四年は古市公威の没後五〇年を、記念する年に当たっている。それからまた古市を最初の会長として発足した土木学会の創立七〇年を、記念する年に当たっている。そこで七〇年前から五〇年前にかけて、古市の事蹟を振りかえってみよう。

七〇年前の大正三年に、古市は元気で満六〇歳の誕生日を祝うことができた。前稿で述べたように一九一〇年(明治四三年)から一九二二年(明治四五年、大正元年)にかけて、古き学友といふべき斎藤修一郎、松井直吉、鳩山和夫、小村寿太郎、石本新六、菊池武夫、長谷川芳之助を、次々に失なつた。しかもこの間に、すなわち明治四五年三月に、母のせい(潜)が七九歳で天寿を全うしたのであった。一人息子の公威がフランスで勉学にいそしんでいるときに、公威の祖父、父があいついで他界したから、母は公

威が元気でさえあればと、念じつつつけてきた。古市家は代々、嫡流の男子が生まれず、養子を迎えることを余儀なくされたので、公威、洛子の一男一女を恵まれただけでも有難い幸せと考えられた。さらに公威から二人の孫が生まれ、母は晩年を賑かに過ごすことができた。公威も洛子も幼少から抜群の秀才ぶりを示したものの、洛子が結婚することなく公威の妻を助けて公威の子女の養育に終始しているのが心残りであった。ともあれ古市は妻と妹に家庭をゆだねて後顧の憂いなく、公事に専念したのであった。土木学会は、土木の大御所といわれた古市公威が先頭に立つて創立したように考えられがちであるが、実際はそうでなかった。古市によって東京帝国大学の土木工学科の教授に選任された人々が、すなわち古市の後継者がやむにやまれず動きだして産みださ

れたものであった。大正三年九月十五日、築地の精養軒で土木学会発起人総会が行われ、定款、規則を原案どおり可決したあと、役員選挙によって会長に古市公威、副会長に沖野忠雄、野村龍太郎、常議員に石黒五十二、中山秀三郎、日下部弁二郎、古川阪次郎、近藤虎五郎、白石直治、広井勇、仙石貢を選出した。さらに一月二四日に文部省が社団法人として土木学会の設立を許可し、二月七日に東京区裁判所で法人設立登記が完了した。

このようにして土木学会は発足したわけであるが、上記総会に先だつて五月二九日から三一日にかけて、下記のような設立趣意書が定款、規則の草案を添えて六〇〇余名の土木工学者あてに発送されていた。

土木学会設立趣意書

泰西諸國ノ工学界ヲ觀ルニ各專門家ハ競テ新學ノ研鑽ニ從事シ改メトシテ舊マズ各自研究実験ノ成績ヲ發表討論スルノ機關トシテハ則テ學會ヲ興シ刊行物ヲ頒布シ恒ニ新學ノ進歩發展ヲ怠ラザルヲ期ス新學現時ノ隆盛ヲ致セル蓋シ偶然ニアラサルナリ而シテ我國ニ於テモ現ニ機械、電氣、建築等ノ如キ既ニ各專門ノ學會ヲ設立シ研鑽ヲ怠ラサルハ我工學界ノ為メ實ス可キナリ然ルニ吾人專攻ノ土木學科ニ至リテハ學界其人ニ乏シカラス事業亦尠少ナラサルニ拘ラス今日ニ至ルマテ未ダ土木學會ノ設立ヲ見ルヲ得ザリシハ誠ニ遺憾ノ極ニシテ亦工學界ノ一大欠点ナラストセス仍テ吾人茲ニ土木學會ヲ設立シ會誌ヲ刊行シ研究討論ノ途ヲ開キ汎ク意見ヲ交換シ以テ土木工學ノ進歩及土木事業ノ發達ニ資センコトヲ期ス

工学会から続々と土木工学者が退会して工学会がやせほそり、存立が危ぶまれることは必至であった。

なんとか工学会を維持しようと腐心する土木工学の長老のためらいをはねかえして、土木学会設立を推進したのは、東京帝國大学の土木工学科の教授であった中島鋭治、広井勇、中山秀三郎であった。たまたま一八五四年に生まれた古市公威、沖野忠雄の還暦記念の資金募集が計画されていた。古市も沖野も、封建的な親分子分関係の祝賀事業を好まなかつたので、この機会に土木学会を設立しようともちかけ、古市を説得したのであった。そうして古市を設立運動の先頭に推したて、集まつた還暦記念募金は古市、沖野の指示に従つて土木学会に寄付され、その基金となつた。すなわち土木工学に長く貢献した古市、沖野の功績を記念する事業の代わりに、土木学会を創立するという結果になった。しかも第一代の会長に古市公威が選出され、ついで第二代会長に沖野忠雄が選出されたから、まずはめでたい発足といふことができよう。

土木学会が発足してみると、案じられたように工学会の会員数が減り、機関誌の内容も迫力に乏しいものになっていった。大正六年に山尾庸三が亡くなるが、没前に古市は工学会の会長になつた。古市はいやおうなく工学会の新しい進路を開拓せねばならなくなつた。ついに大正一一年に工学会は改組された。すなわち工学会は個人会員をもたず、日本鋳業会、日本鉄鋼協会、土木学会、造船協会、建築学会、電氣学会、火兵学会、煙房冷房協会、工業

この趣意書にあるように「土木工学者も土木事業も増えたのに土木学会が設立されていないのは困つたことである。機械、電氣、建築などの学会はすでに発足して成果をあげているではないか」と残念がつているのは、当然至極であつた。しかも大正三年まで、おくれたしまつたのは何故であろう。古市公威はじめ土木工学の長老が、土木学会が発足することによって土木工学者が工学会から続々退会しては大変であると、憂えたからである。特に古市は工学会の副会長であり、老衰した会長の山尾庸三に代わつて会務を執行していたからである。もともと工学会は明治一二年（一八七九年）に、工部大学の卒業生が、工部省と工部大学校を築きあげた山尾庸三を会長にかついで結成した学会であつた。最初の会員は二三名であつたが、工学関係の最初の学会であり、工学のすべての部門の専門家に参加を呼びかけたので会員はだんだん増加した。工部省が明治一八年に廃止され、工部大学校が一八九年に東京大学工芸学部へ併合されて帝國大学工科大学になつてからも、工学会は大日本帝國の工学、工業、工芸の進歩をめざして、富國強兵、殖産興業の初志を守つたのであつた。しかしながら明治一八年に日本鋳業会、一九年に造船学会（のちの建築学会）、二一年に電氣学会、三〇年に造船協会、機械学会、三一年に工業化学会が創立されるにつれ、工学会への入会者は減り、退会者が増えるという傾向が顕著になつた。そこへ土木学会が創立されれば、

化学会、電信電話学会、機械学会、照明学会といった二二の学会（法人もしくは、その代表者）から成る総合学会となり、会長は理事長と改められた。古市は引続き理事長となり、昭和九年に病没するまで会務につくしたのであつた。工学関係の個々の学会が活動するほかに、学会の境界を越えて活動すべきことが多々あることを、古市は確信して工学会を守つたのであつた。古市は土木の大御所であつただけでなく、工学全体の大御所ともいわれたのは故ないことではなかつたのである。すでに明治一九年に古市は最初の工科大学長になつており、翌年に工学会に入会し、二一年以降は幹事に選出され、会長（山尾庸三）、副会長（帝國大学総長であつた渡辺洪基、ついで榎本武揚）を助けて、工学会を発展させてきた。二三名で発足した会員が一〇年のちに一二〇〇名に達し、二三年一〇月に工学会の臨時大会を開催したとき、古市は大会委員長として「昨年のパリ万国博を見て、工学会の前途は遼遠であることを痛感し、会員の一層の奮起を望まざるを得ない」と叫んでいる。一年ごとに開かれるパリ万国博から各国における科学、技術の現在、未来をうかがう視野の広さを想うべきである。このとき古市は三六歳であつたが、日本の工学を代表する実力者になつていたのである。同年の九月には最初の勅選議員として貴族院の議席を与えられており、實録に不足はなかつた。明治一一年のパリ万国博は文部省のフランス留学生として、明治二二年のパリ万国博は山県有朋（内務大臣）のヨーロッパ視察の

首席随員として参観し、多くのことを学びとつていたのである。土木学会の会長の任期は一年で、会長は総会で会長講演をし全會員に指針を与えることになっており、古市公成は第一回総会と第二回総会で会長講演を行なつてゐる。古市は日記、隨筆などの文章を残していないから、その思想、見識をくみとることのできる資料として、これらの会長講演以上のものはないといつても過言でない。古市公成が土木技師に向かつて將に將たれと呼びかけたと伝えられているが、その原典ともいへば第一回総会での会長講演の全文記録に目を通す機会はなかなかあるから、次に抜粋して紹介しておく。

第一回総会会長講演 大正四年一月

専門の学会に會長たることは學者の最名譽とする所なり。今度土木学会の創立に方り、料らずも余が其の第一回の會長に當選したるは、余にとりて無上の光榮なり。茲に謹んで會員諸君に感謝す。

去月六月一日有志者の發表したる土木学会設立の趣意書は、諸君の熟知する所なるべし。文明の進歩に伴ひ、専門分業即所謂スペシャリゼーションの必要を感じるは一般の法則にして、土木学会も亦大体に於て此の法則に依り生れたるなり。茲に工学に關する学会の來歴を見るに、明治十三年工学会設立の際に於ては工学に關する總ての学科を之に包容して他に専門の学会を設くるの必要を感じず。工学専門の者尙少數なる當時に於て、斯の如きは固より當然のことなり。我邦の文明尚幼稚なる結果なりと、云うを得べし。……工學所屬の専門を大別して七科とすれば、右に掲げたる六学会（日本鉱業會、建築學會、電氣學會、造船協會、機

械學會、工業化學會）の他に土木学会なるべからず。……今や土木学会は成立したり。然れども専門分業の趨勢は此に止まらず。更に歩を進めつつあり。……

……本會は他の学会と同じく専門分業の必要に依り設立せられたるものなるを以て、自今以後本會會員は専門の研究に全力を傾注すべきこと勿論なるが、茲に少しく議論の存するあり。専門分業の方法及程度は場合に依り大に取捨すべきものありと云ふこと是なり。……余は極端なる専門分業に反対する者なり。専門分業の文字に束縛せられ萎縮する如きは大に戒むべきことなり。殊に本會の方針に就て、余は此の説を主張する者なり。

本會の會員は技師なり。技師にあらず。將校なり。兵にあらず。即指揮者なり。故に第一に指揮者たるの素養なるべからず。而して工學所屬の各学科を比較し、又各学科相互の關係を考ふるに、指揮者を指揮する人即將に得たる人を要する場合は土木に於て最多しとす。土木は概して他の学科を利用す。故に土木の技師は他の専門の技師を使用する能力を有せざるべからず。且土木は機械、電氣、建築と密接な關係あるのみならず、其他の学科に就ても……不斷相互に交渉するの必要あり。茲に於てか「工學は一なり。工業家たる者は其の全般に就て知識を有せざるべからず」の宣言も全く無意味に非ずと云ふを得べし。……

故に本會の研究事項は之を土木に限らず、工學全般に括むるを要す。只本會の工学会と異なる所は、工学会の研究は各学科間に於て軽重なきも、本會の研究は總て土木に偏着せざるべからず。即換言すれば、本會の研究は土木を中心として八方に發展するを要す。是余が本會の爲に主張する所の専門分業の方法及程度なるものなり。

尚本會の研究事項は工學の範圍に止らる。現に工科大学の土木工學科の課程には、工學に屬せざる工藝經濟學あり、土木行政法あり。……工科大学の課程には工業衛生學なし。土木に關する衛生問題は甚重要なり。

而して大學の課程になきものは益々本會の研究を要求するものなり。是等數ふれば尚他に幾許あるを知らず。

人格の高き者を得る爲には總括的教育を必要とするの説は屢耳にする所なり。西洋に於て羅旬語に偉大の效果あるを認むる學者少からざると共に、我邦に於ては漢學を以て人物を養成すべしと説く者多し。皆相応の理由あり。是等は本問題に直接關係なきも、參考の価値あるを認む。會員諸君希くは本會の爲めに研究の範圍を擴張せられんことを。而して其の中心に土木あることを忘れられざらんことを。(完)

古市は、將に將たる土木技師は深く専門分野に通ずるだけでなく、広い視野に立つて科学、技術を學ばねばならないと戒めてゐる。甚だ厳しい要求であるが、これは古市が自己に課した努力目標であつたし、實際に怠ることなく、長い生涯を一貫して変わることがなかつた。

古市公成は官途に就いてから、声高に政治や戦争を論ずることがなかつたので、次に示す土木学会長としての講演は見おとすことのできない資料といえよう。

第二回総会会長講演 大正五年一月

戦争に學國一致を要することは、古來人の唱ふる所なるも、今度の戦乱に於ける如く之を現実に勵行したること、未曾で聞かざる所なり。從來動員即モビリゼーションなる語は直接戦亂に關係あるもののみ使用されたる如し。然るに今度は之を社会百般の事に応用し、戦亂勃発後間もなく経済の動員、工業の動員を行ひたりと云ひ、遂に知識の動員インテリクチュアル・モビリゼーションなる語さへ使用せらるるを聞く。畢

竟國家全体も軍隊的に組織し、其全力を戦争なる一事に傾注するを要するに至れるなり。更に語を換へて言へば、總て國民は直接戦亂に参加するか、或は軍事上必要な他の職務に従事するか、二者其一に當るの覚悟なかるべからず。吾人は予て此場合に處するの途を講ずるの必要ありと認む。

義勇兵に關して一の美談あり。旧話に属すれども茲に之を紹介す。千八百七十年普仏戦争の時、奈波翁三世スタンにて降伏の後、巴里に國防政府なるもの成立したり。其團員の一人なるジュール・シモンが或日内務省に到りたるに二等勲章を佩用したる一人の老兵が銃を擽けて門衛の位置に立たり。見れば奈波翁三世の文部大臣たりし有名な歴史家ヴィクトル・デュリュイなり。ジュール・シモン馬車より下りて「人の師たる者は何事に就ても師表となる。君が此模範を國民に示されたるを感謝す」と述べて握手したりと云ふ。

頃口新聞の報する所に拠れば山川東京帝國大學總長を始め法科大学教授諸君は射撃の練習に熱心せらるる如し。蓋一旦緩急あれば義勇兵に奉じ奮然銃を執りて起つ覚悟なるべし。其世道人心に益すること勿論にして懦夫も志を立つるの結果を生ずべく、右のデュリュイに对照して國民の感謝すべき所為なりと云ふべし。然らば吾人技術者も亦之に倣ふて射撃の練習を始むべきか。茲に於て聊考ふべきものあり。左に一例を挙げて參考に資せんとす。

仏國政府の土木技師は皆工兵の予備士官なり。彼等は陸軍省所管のニコール・ポリテクニクにて基礎科学の高等教育を受くると共に多少軍隊の生活に慣れ、二年の後工部省所管の土木学校に入り、三年にして卒業し土木技師として採用せらるると共に予備工兵少尉に任ぜらる。其後技術官として進級すれば同時に士官としても進級し、中佐に達して止む。技師に三級あり。技長に二級あり。少尉以上、中佐に至る五級に該當す。技長の上に技監二級あれども軍人として相當官なし。土木官は平時工部

省に属し大抵各地に在動して道路河川等の工事の設計指揮監督に従事し、事あるときは動員令の発せらるると共に陸軍長官の命令の下に服務す。右の如き組織は有時の日、吾人技術者をして一兵卒以上の効果あらしめ、所謂人物経済上の利益少からずと認め、會て聊計畫する所ありたり。即工科大学に於て多少の軍事教育を授け、技師たる者をして予備士官たるの素養を得せしめんとしたるなり。之を二三の軍人に謀り、賛成を得て授業科目までも決定したるが、更に陸軍の意向を探りたるに反対多きを知りたり。即軍人は根本的軍人たらざるべからず。案の如きものは却て邪魔なりとの意見にして、到底実行の見込なきを以て遂に断念するに至りたり。其後日清日露の兩役あり。我邦としては未嘗有の大兵を動かしたるも、然も義勇兵其他非軍人の直接戦闘に参加したる者は甚だ少数なりしを以て別に問題なく経過したるが、今後は大に事情を異にすべし。所謂根本的軍人へのみ戦争を一任し去る能わす。国家の全力を挙げて戦はざるべからず。故に国力の利用方法に就ては大に研究を要す。独逸は是等の問題に於て予て十分に準備する所ありたるを以て今日の強を致せり。仏國露國等に於て当初軍需品の製造に必要な職工までも戦線に送り、後又俄に之を召還し、之が為に少からざる混雑と弊害を生じた如きは不準備の一例なり。鑑戒を要す。

今度の戦乱に仏國にては、常設の予備士官の外に、余の會て学びたるニコール・サントラルの卒業生及在学生までも臨時士官に採用したり。将来の戦争に於ては出来得る限り多数の協力を要すること明かなるを以て、今より人物利用の方法を十分に講究し置かざるべからず。技術者動員計畫の設定は目下の急務なるを確信す。(完)

大正八年二月二七日に古市は、多年の勲功によって男爵を授けられた。大々的な論功行賞としてでなく、古市だけの授爵が唐突に報道された。勲功のあったものが、病気で絶望状態におちい

って授爵された前例はあるが、いかなる理由で行なわれたかは古市自身にも不可解であつたらしい。もし授爵されるなら、日露戦争の論功行賞という恰好の機会があつた。京城釜山鉄道の建設を評価したものと受けて受けとめられたであらう。臨時軍用鉄道監として京城義州鉄道などの建設を担当した長州藩出身の山根武亮が男爵になったのに対して、古市の処置は不公平であることは、古市を重用した山根有朋もよく承知していた。戦争を重ねるたびに、戦争の行賞が大盤振舞いになり、しかも論功が武に厚く文に薄くなりがちであつた。山根は工兵出身の陸軍少将で明治三十九年に中将に進級し、いづれ大將になることが期待されたが大正四年に進級することなく予備役に編入された。

授爵は古市にとり甚だ唐突であつた。明治二年から二年にかけて山根有朋のヨーロッパ視察に随行した人々は、ヨーロッパへ旅立った二月二日を記念して山根邸に集まるのが慣例になつていた。その二月二日に山根は、まもなく古市は授爵されるであらうなどともしたりはしなかつたからである。山根が波多野敬直(官内大臣)に向かつて、一群の授爵人事から古市だけを切りはなして早急に行なうより、しきりに催促していたことは、原敬(当時の総理大臣)の日記に書きとめられている。山根が催促しなくても、まもなく数人まとめて授爵される手筈になつていた。それにもかかわらず、山根はなぜいらだつたのであろうか。健康がすぐれないから内閣を投げだしたいと弱音を吐く寺内正毅に、

死ぬまで頑張れと叱咤しつづけた山根有朋にとつて、大正八年一月三日に寺内が他界したことは衝撃であつた。もともと風邪をこじらせて肺炎になりがちな山根は大患に悩んだばかりでもあつたから、古市に対する心残りを片付けようと思つたといふのである。山根を親分と仰ぐものは、ほとんどが叙位叙勲をあてにして粉骨砕身したが、古市だけは為すべきことを為しただけという心境で平然としていた。それだけに山根は焦つたのであろう。

毎年一月二日には山根は、明治二年から二年にかけてのヨーロッパ視察に随行した部下に囲まれて、気晴らしがしたかつた。その日に参集したのは、内務省の古市公威(当時は土木局長)、荒川邦成(書記官)、中山寛九郎(秘書官)、外務省の都築繁六、それに平佐是純(騎兵中佐)、中村雄次郎(砲兵少佐)、小坂千尋(歩兵少佐)、賀古鶴所(軍医)で、帰国してから著しい業績をあげるものと期待された。荒川、中山、平佐、小坂は長州藩出身であり、特に小坂は明治三年から七年にかけて留学を命ぜられてサンシールの士官学校、参謀学校を卒業し、帰国してから兵学の最高權威と認められるようになり、山根の期待は甚大であつた。ところが小坂は早くも二四年一月にコレラで急死し、山根は神も仏もないものかと思つて消沈してしまつた。小坂のほかに幾人かが姿を消したが、それを補うように福島安正、大島健一、平井政造が加わつた。福島はそのころ公使館付武官としてドイツに駐在してお

り、のちに山根の参謀をしばしば勤めた。大島は二三年からドイツに留学しており、ついで日清戦争で第一軍司令官となつた山根の副官となり、そのちもしばしば副官となつた。平井は軍医で、日清戦争以来の侍医で、信頼が並々でなかつた。山根は部下に望むことが厳しく、大小となく叱責したが、これらの人々はいずれも、叱責をくぐつて生き残つた御氣に入りであつた。古市は叱責されたことがなく、いつも期待以上の成果をあげたので、山根をこわいと思つたことがなかつた。ただ一度だけ、白い眼をむいて睨みつけられたことがあつた。山根が想つたように日露戦争が経過し、さぞ満足であつたらうと話しかけたところ、一変して不気嫌になつたのである。とても勝利はおぼつかなくて、開戦に踏みきれと主張したりはしなかつた、開戦のあととも言いかけて黙つてしまつたのである。戦争を推進したのは桂太郎、山本権兵衛、小村寿太郎であつて、山根ではないと言いつたのであつた。日露戦争のおかげで侯爵から公爵に昇り功一級金鵄勲章を授けられていただけに、古市の言葉は棘のように胸にささつた。二月二日に古市の顔を見るたびに、棘の痛みがよみがえつたのかもしれない。

大正十一年二月一日に山根有朋は病没した。その翌年一月四日に古市公威は樞密顧問官に任ぜられた。それ以前にも樞密顧問官に推される機会があつたが、適任ではないと固辞してきた。山根に重用されれば、山根の思う通り粉骨砕身せねばならない。山根に拔擢されて宮内大臣となつた中村雄次郎が、宮中某重大事件

(皇太子妃に内定した久通宮良子女王に色盲の遺伝があるととして、山県が内定取消を主張して起こった混乱)で苦慮しているのは、見るに忍びなかった。中村とは早くから、困ったことがあると助けあったが、手の出しようもなかった。この辺の事情を承知している浜尾新が、改めて古市公威を説得して枢密顧問官任命にこぎつけたのであった。清浦奎吾が組閣して枢密院議長を辞任したため、副議長の浜尾が議長となり、一木喜徳郎が副議長になった。東宮学問所副総裁を勤めた浜尾としては、摂政官を困惑させるような枢密院にはならなかったのである。しかしながら浜尾は一三年九月に枯葉を焼いていた庭のくぼみで火傷して急死し、穂積陳重が議長になった。浜尾を助けるほどのこともなくて終ったのであった。ついで一五年四月に穂積がなくなり、倉富勇三郎が議長となり、平沼騏一郎が副議長となった。浜尾も穂積もいない枢密院は古市にとって、必ずしも据わり心地のよい場所ではなかったようである。

古市公威の本領はやはり、工学の大御所として国家に役立つこととであった。理化学研究所が発足してまもなく第一代の所長であった菊池大麓が脳溢血で急死したため、いやおうなく大正六年一月一日に第二代の所長となった。かつて東京大学工芸学部に工部大学校を併合して、帝国大学工科大学を発足させようとしてうまくいかず困惑していた菊池大麓(理科大学長にして工科大学長心得を兼任していた)に代わって、古市は工科大学長として手

腕を振るい世界有数の工科大学を立派につくりあげたが、理化学研究所の場合は思うように運ばなかった。第一次大戦後の不況がたたって理化学研究所を動かすだけの資金を集めることができず、一〇年九月三日に辞任して、若い大河内正敏が第三代所長になった。大河内は東京帝国大学工科大学造兵学科を明治三六年に卒業した秀才であった。古市は明治二〇年に海軍省と協議して、工科大学に造兵学科、火薬学科を新設した。造兵学科については砲兵少佐の中村雄次郎が創設に協力して、砲兵大尉の天野富太郎が最初の教授となった。古市は有坂碩蔵を早くから親しく指導してフランス留学させ、教授にとりたてた。従って大河内正敏は古市にとって弟子のまた弟子ということになり、所長を辞任して顧問となった古市に対して、研究所の現況を報告することを怠らたりはしなかった。

古市公威は大正九年一月に発足した学術研究会で第一代会長に選出されたが、これは大河内正敏のような新進気鋭に代わってもらうわけにいかなかった。そうして昭和三年八月には日本動力協会会長に推され、ついで世界動力会議日本国内委員会会長になった。また四年一〇月には万国工業会議会長となり、万国工業会議を東京で開催して見事に成功させた。これと同時に世界動力会議東京部会を開催して予想以上の成功を取ることができた。もともと万国工業会議は、アメリカ工学会の要請によつて実施されたものであるが、世界各国から一二八五名が参加し、はしなく

認識せられざるが如し是日本人の伝説を解する者少きと前記の如く仏蘭西人の対外関係に冷淡なるに因る此の点に就ては仏蘭西に於ても歐洲大戦前より識者は既に之を憂慮して各国が自己宣伝に汲々たる時代に仏蘭西が其の勢力の維持に無頓着なるは慨歎に堪へずと云へり桑港博覧会に仏蘭西文部省が仏蘭西科学に関する書籍論文等を出陳したるは有識者の意見の反応と見るべく近く日本に於ける日仏会館の設立巴里に於けるシテ・ユニヴェルシテールの開設等亦同じ意味の施設なるが如しラ・シヤンス・フランセーズは前記文部省出品の解説とも見るべきものに過ぎざれども以て仏蘭西が科学に貢献する所多大なるかを窺ふに足るべく又日本科学の将来に資する所少からざるを想ふ日本会館が本書を翻訳刊行したるは最も其の任務に適した美事なりと云ふべし尙最近十五年間に於ける科学の進展に就て特に注目すべきもの多し本書の追加として是等を網羅する新著の発行近きにあらんことを切望す

フランスの自然科学、人文科学から学ぶことを願う古市は、フランス留学時代の情熱を失なうことなく、日進月歩の科学、技術を追究しようとしていたのである。

もともと『仏蘭西科学』の原著、ラ・シヤンス・フランセーズ La Science Française は一九一五年(大正四年)のサンフランシスコ万国博に提示するために作製された国策的出版物であった。自然科学、人文科学の部門別に、その発達、現状を代表的学者が、すなわち哲学はベルクソン(訳者は出陣)、社会学はデュルケーム(松本潤一郎)といった具合に担当し、全体をリュシアン・ポアンカレ(杉山直治郎)が締めくくっていた。

古市はこの年の八月には、日仏会館の事業として出版された上下、全二巻の訳書『仏蘭西科学』両書院に序文を寄せているので、次に示した序文から古市の学術交流に対する情熱を読みとっていただきたい。

那威のアベルが巴里より郷里への書信中に「仏蘭西人には教ふるという考のみありて学ぶといふ考なし」との一節あり是は千八百二十六年の事にして今より百余年前の話なり當時巴里は泰西科学の中心ともいふべき地にして各国の学者が研究の為に多数来往する時代なりし故仏蘭西人には仏蘭西科学の卓絶なる他に学ぶべきなり他より来り学ぶべきなりとの信念ありとアベルは觀察せしならん蓋し誇大の嫌あるも亦全く誤れりとも云ふべからず其後各国に於ける科学の研究大に発達して顕著なる成績を多く挙ぐるに至り遂に科学の中心を巴里を去りたるが如き観あり殊に我邦に於ては近年仏蘭西科学(特に自然科学を指す)の価値が適当に

古市公威は明治四〇年九月に韓国統監府鉄道管理局長官を辞任して帰国し、もはや官途に就こうとは望まなかった。しかしながら明治五〇年を期して東京で万国博覧会を開催しようという動きが具体化するようになり、四一年六月に日本大博覧会評議員になった。準備に当った会長の金子堅太郎は、パリ万国博覧会をとおった大博覧会を成功させるために、工学の大御所である古市を促がさずにはいられなかった。準備を進めているうちに、西園寺公望内閣(第一次)が財政の積極政策で失敗して桂太郎内閣(第二次)に代わると消極政策に転じ、大博覧会の事務局も廃止されることとなった。工事意匠計画の懸賞競技も発表され、古市はその審査委員長に指名されていたが、大博覧会は画餅に終わった。しかしながら四二年四月に評議員となった日英博覧会は、翌年ロンドンで開催され古市も渡英した。日英博覧会は明治三五年に結ばれた日英同盟にちなむもので、三七年の英仏協商を謳歌して四一年にロンドンで開催された英仏博覧会にならった友好行事でもあった。これらの博覧会はまたロシア、ドイツに対して大英帝国の国勢を誇示する祭典でもあった。三九年から四一年にかけて駐英大使となつた小村寿太郎も、古市の友情をこめた尽力に満足したことである。古市はロンドンに滞在中に、イギリスの科学、技術の現況をつぶさに視察したが、特にロンドン地下鉄の機能、経営を調査して、大都市内部の高速交通手段としての地下鉄を高く評価する

挫かれていった。暴走を始めた軍部における將に將たる人々を、枢密顧問官の古市はどのような想いでみつめていたであろうか。古市はつねに山県に向かつて言った、まだまだ日本の科学、技術は欧米から多くのことを学びとらねばならないと(そのたびに山県は、明治二二年にパリ万国博覧会の記念建造物のニッフェル塔を仰いだことを、想いおこしたであろう。塔を築いてフランスの国威を發揚したギュスタヴ・エッフェルは、エコール・サントラルの卒業生であつた)。科学、技術の振興を願う古市の胸中はどうなであつたらうか。

昭和七年の暮に動脈硬化の症状が進み、翌年に心臓性喘息を併発したので、結婚五〇年と傘寿の祝宴も断念して静養に専念した。宮中杖を下賜されたこともあつて、一日も早く健康を回復しようとして養生にはげんだようである。たまたま小康を得たときに、無聊を慰めようとして演能を思ひたつた。いざ鎌倉の意気ごみで「鉢の木」を演じてみると非常に好調で、興に乗って力が入つた。それがかえつて病状を悪化させた。古市はこれという趣味も道楽ももたず、しばしば能楽にうちこんだことを、最後まで悔いしなかつたであろう。ストレスを解消し心身のバランスを回復するのに、能楽以上の妙薬はなかつたであろう。昭和九年一月二八日ついに古市公威は病没した(看病に心くだいた妻の幸子も、後を追うように翌年に他界した)。なお病没に当たつて勲一等旭日桐花大綬章を授けられた。

ようになった(大正九年八月に古市は東京地下鉄道会社の社長となるが、土木の大御所として事業家に利用されての就任ではなかつたのである)。

大正四年に開かれたサンフランシスコ万国博覧会、いわゆる太田洋の発見から四〇〇年たち、パナマ運河が開通したことを記念するものであつたが、九年前の大震災からサンフランシスコが復興したことを祝う祭典でもあつた。この万国博覧会に政府は参加することを明治四五年に通告して準備にかかり、古市も工学会を代表して助言し、その功勞が認められて銀盃を下賜されている。

日本で万国博覧会を開催しようと考えた人々が大正一五年に博覧会俱樂部を結成し、古市はその会長に推挙された。関東大震災からの復興を記念する東京万国博覧会を実現しようとして決意するに至つた。昭和五年八月に古市は総理大臣の浜口雄幸を訪ねて、昭和一〇年に東京、横浜地域で万国博覧会を開くよう勧告した。前年の万国工業会議で大成功を収めて自信満々の古市も、大成功をつぶさにみつめた浜口も多くを語る必要がなかつた。東京万国博覧会に海外からも多数の参加があれば、東西文明の交流、不況の克服の端緒もつかむことができ、巨額の資金も償のうて余りあると、古市は樂觀していた。浜口は内心で、熱狂的な軍國主義を抑えることができるなら、いざ実現できようと考えていたかもしれない。まもなく浜口は凶漢に拳銃で撃たれて倒れた。さらに日本の軍部は満洲事変を起し、戦争ははてしなく拡大し、万国博覧会を開催する気運は

再起の見込がなくなつたときに、古市は長男の六三を枕辺に呼んで次のように述べた。「長い生涯にいろいろな仕事をしたが、伝記を書いてもらうほどの功績はなかつた。もともと仕事というもの、多くの人々との協力によつて実現するものである。古市一人で成しとげたように書いて、他人の功勞を見失なわせることは、後世を誤らせることも甚だしい。伝記はそのようになりがちであるから、伝記をつくる話を持ちこまれても、断つてほしい。」將に將たるものは、つねに驕ることなく、歴史の大きな流れを見失なうなど、古市は戒めているように思われてならない。